

箱崎 71

—箱崎遺跡第 120 次調査報告—

2024

福岡市教育委員会

箱崎 71

—箱崎遺跡第 120 次調査報告—



2024

福岡市教育委員会



巻頭図版1 箱崎遺跡第120次調査 第3面完掘時全景 略合成写真(1/200)



巻頭図版2 箱崎遺跡第120次調査地点 第3面近世溝SD-1・第2面枕列・リップルマークの位置関係(西から)

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われており、東区箱崎周辺には、弥生時代から近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は集合住宅建設工事に伴う箱崎遺跡第120次調査について報告するものです。調査では溝などが出土し、中世から近現代の箱崎遺跡の様相を明らかにすることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、関係者の皆様には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例 言

1. 本書は令和3(2021)年9月15日から12月13日に福岡市教育委員会が行った、東区箱崎3丁目8-46 所在の箱崎遺跡第120次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて座標北で、座標は世界測地系による。
3. 遺構の性格を示す記号として、SD(溝)、SK(土坑)、SX(性格不明遺構)、K(攪乱)を用いた。
4. 本書に掲載した遺構・遺物の実測図は赤坂亨・大森真衣子・加藤良彦・野口聡子が作成した。
5. 本書に掲載した挿図の製図は赤坂・荒牧宏行が行った。
6. 本書に掲載した写真は赤坂が撮影した。
7. 本書の編集・執筆は赤坂が行った。
8. 本書に関係する記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。

遺跡名	箱崎遺跡	調査回数	第120次	遺跡略号	HKZ-120
調査番号	2128	分布地図幅名	34 箱崎	遺跡登録番号	2639
申請地面積	665.28㎡	調査対象面積	187.50㎡	調査面積	188㎡
調査地	福岡市東区箱崎3丁目8-46			事前審査番号	2021-2-172
調査期間	令和3(2021)年9月15日~令和3(2021)年12月13日				

本文目次

巻頭図版	
I はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査組織	1
II 立地と周辺の調査	1
III 調査の記録	3
1 調査概要	3
2 調査成果	3
3 発掘成果からみた調査地の変遷	9
附 調査写真	11

挿図目次

巻頭図版1 箱崎遺跡第120次調査 第3面完掘時全景 略合成写真(1/200)

巻頭図版2 箱崎遺跡第120次調査地点 第3面近世溝SD-1・第2面杭列・リップルマークの位置関係(西から)

図1 箱崎遺跡と既往の調査地位置図(1/5,000)	写真1 1区第1面全景(東から)
図2 第120次調査(1-2区)位置図(1/500)	写真2 1区第2面全景(東から)
図3 第1面遺構配置図(1/150)	写真3 1区第3面全景(東から)
図4 第2面遺構配置図(1/150)	写真4 第2面杭列・リップルマーク(北から)
図5 第3面遺構配置図(1/150)	写真5 2区第2面完掘状況(北から)
図6 1区西・東・南壁面土層図(1/100)	写真6 2区第3面完掘状況(北から)
図7 2区北壁面土層図(1/100)	写真7 1区第2面リップルマーク(西から)
図8 1区2面出土遺物(1/3-1/2)	写真8 1区第3面SD-1断面土層(西から)
図9 SD-1-SK-2出土遺物(1/3-1/2)	写真9 1区第3面SK-2遺物出土状況(東から)
図10 SX-3出土遺物(1/3-1/2-1/8)	写真10 1区第3面SK-2完掘状況(東から)
図11 SX-4ビット・2区3面出土遺物(1/3-1/2)	写真11 2区第3面SX-3西側包含層(南から)
図12 調査地周辺地図(明治33年)	写真12 2区第3面SX-3-4掘削状況(東から)
	写真13 2区第3面SX-3埋土内遺物出土状況 (西から)
	写真14 2区第3面SX-3掘削終了時状況 (北から)

I はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、東区箱崎3丁目8-46における集合住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和3(2021)年5月19日付けで受理した(2021-2-172)。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡の範囲であり、令和2年7月1日に確認調査を実施し、地表下(以後GL-)35cmおよび70cmで遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課は申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取扱いについて協議を行った。その結果、予定建築物の構造および造成計画、工事による遺構への影響が避けられないため、令和3年度に発掘調査、同4・5年度に整理・報告を行い、記録保存を図ることで合意委託契約を締結した。申請地665.28㎡のうち調査対象としたのは工事で埋蔵文化財に影響がある187.50㎡である。未調査部分には埋蔵文化財が包蔵されている。

発掘調査は令和3(2021)年9月15日から12月13日に実施した(調査番号2128)。調査面積は188㎡、遺物はコンテナ30箱分が出土した。

2 調査組織

調査委託	株式会社明日翔		
調査主体	福岡市教育委員会		
調査総括	文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波 正人
		調査第2係長	蔵富士 寛
庶務担当	文化財活用部文化財活用課		内藤 愛
事前審査	文化財活用部埋蔵文化財課		田上 勇一郎・山本 晃平
調査担当	文化財活用部埋蔵文化財課		赤坂 亨

II 立地と周辺の調査

箱崎遺跡は宇美川下流域、多々良川河口左岸の博多湾に面し、南北に延びる砂丘上に位置している。第120次調査地点は箱崎遺跡北東部の宇美川へむけて下る東緩斜面にあり、かつての多々良潟によって西側からえぐられる砂丘の東部際の遺跡の縁辺部にあたる。近世初頭の唐津街道旧道は宮崎宮の南側で東へ折れていたが、江戸時代前期の寛文3年(1663)に現在の九大正門入口交差点で東へ折れ原田方面へと向かうルート(新道)に付け替えられ、これにより箱崎宿は北側に拡大した。当調査地は箱崎宿の新町(新築1丁目)南側と今福町北側の中間に位置する。近代以後の地形図でみると、明治33年(1900)では市街地に隣接する湿地だったが、大正15年(1926)には埋め立てられ、昭和11年(1936)には市街地化している。

西側隣接地では第41次調査が行われ、12世紀中頃から後半頃にかけて木棺墓・井戸・土坑等の生活遺構が確認された。13世紀以降遺構は極端に減少し、13世紀後半には集落としての機能は失われていたと考えられる。また西側の今福町通りに面する地点で第53次調査が行われ中世の井戸、近世の土坑・溝が確認された[図1]。

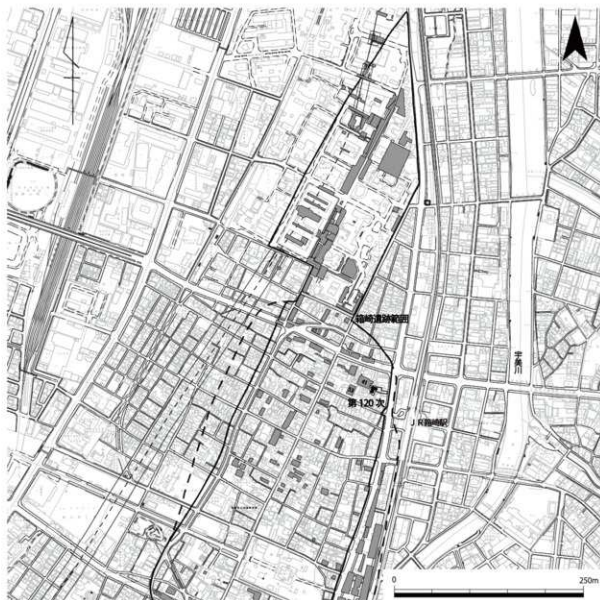


図1 箱崎遺跡と既往の調査地位置図
(1/5,000)

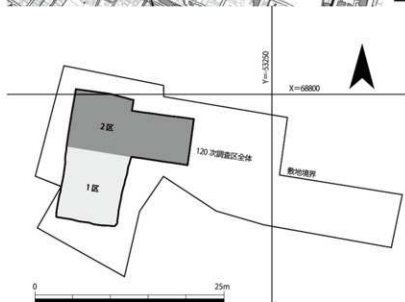


図2 第120次調査(1・2区)位置図
(1/500)

Ⅲ 調査の記録

1 調査概要

調査区は平面直角座標系(2系) $X=+68783\sim+68801$ 、 $Y=-53259\sim-53278$ の範囲に位置する。東側は道路に面し、地表面標高は道路とほぼ同レベルで標高約2.200mである。調査地西側にむかって標高が上がり標高約2.600mである。周囲はブロック塀等を挟んで隣地に接する。調査開始時は建物解体後の更地であった。調査は廃土を場内処理する必要から調査区全体を南側(1区)と北側(2区)に分け、1区→2区の順に調査を行い、各区ごとに遺構面の調査を行った[図2]。

2 調査成果

a. 1区

1区では3面の調査を実施した。試掘では遺構面2面(GL-35cm暗褐色砂質土、GL-70cm明褐色砂質土)、および砂丘面(GL-120cm黄褐色砂)が確認された。重機で1区の表土剥ぎを行ったところ、GL-35cm(標高2.3m前後)で1区南側において褐色粗砂が面的に広がったため、この高さを第1面として調査を行った。1区北側第1面は暗褐色砂質土が全体に広がっていた。

精査したところ1区第1面を掘りこむ遺構は全て現代の重機による埋め戻し痕跡か、現代遺物を含むビットであり、昭和以後の現代生活面であることが確認された[図3,写真1]。

1区第1面の記録・写真撮影ののち、重機で全体下げを行ったところ、GL-80cm(標高1.8m)で黒褐

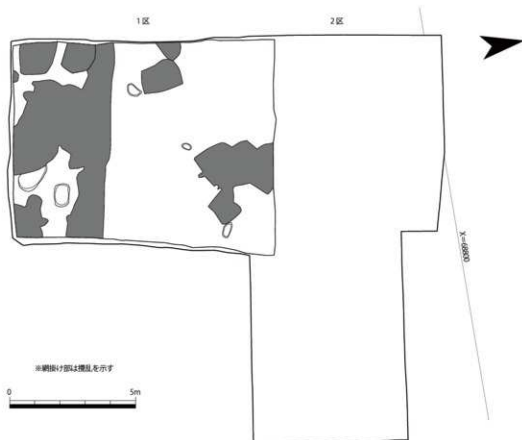


図3 第1面遺構配置図(1/150)

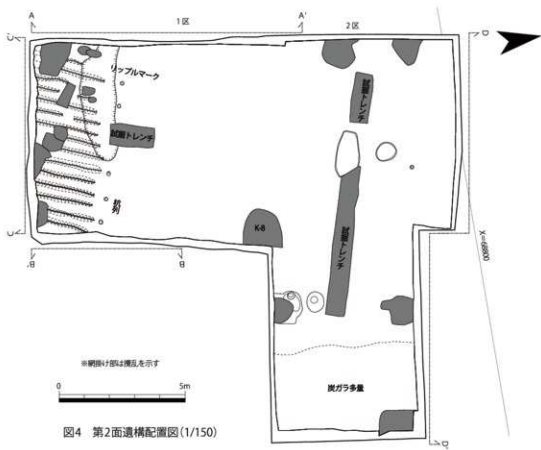


図4 第2面遺構配置図(1/150)

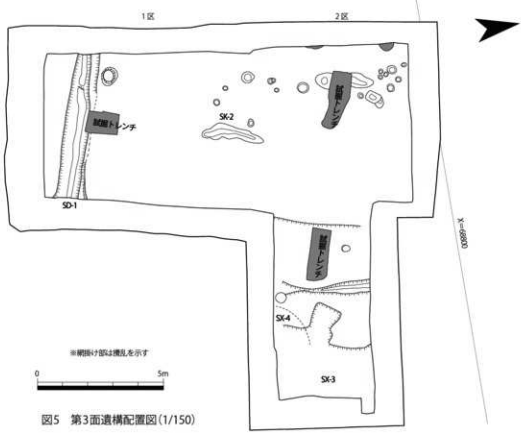


図5 第3面遺構配置図(1/150)

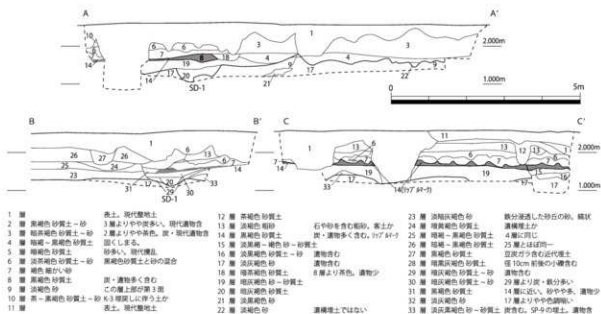


図6 1区西・東・南壁面土層図(1/100)



図7 2区北壁面土層図(1/100)

色砂質土が全面に広がり、この高さを第2面として調査を行った。1区の南半では等高線方向のリップルマーク(間隔40cm,高10cm,波状堆積) [図6,写真4]を検出したが、北半では検出できなかった。また、リップルマークに沿って東西方向に杭列を確認した。 [図4,写真2]。

1区第2面の遺物は、2面検出時に土錘 [図8(7-8)] が、攪乱K-8の埋土より青磁・白磁 [図8(1-5)] が、リップルマークより肥前系陶磁器・土玉 [図8(9-12)] が、リップルマーク以下から第3面までの1区南側黒褐色砂-砂質土層より肥前系陶磁器(紅皿)・陶器播鉢 [図8(13-15)] が出土した。

1区第2面の記録・写真撮影ののち、重機で全体下げを行ったところ、GL-110cm(標高1.5m)で暗褐色砂の砂丘面を検出し、この高さを第3面とした。1区南半第3面では第2面杭列と同じ方向の東西方向溝SD-1(長560cm,幅100cm,深30cm) [図5-6,写真3-8] を、1区北半第3面西側で土坑SK-2(長230cm,幅45cm,深15cm) [図9-10]・ピットを検出した。1区北半第3面東側では等高線方向に沿った砂の縮状堆積を検出したが、遺構・遺物は確認できなかった [図5,写真3]。

1区第3面の遺物は、溝SD-1より龍泉窯系青磁浅形碗・白磁碗・肥前系染付碗・陶器播鉢・土師質火鉢・土錘 [図9(16-23)] が、土坑SK-2より龍泉窯系青磁浅形碗・白磁碗・青磁碗・陶器甕(底部)・土師器坏・土鍋



図8 1区2面出土遺物(1/3・1/2)

[図9(24-32)]が出土している。また、1区3面遺構外から土錐[図11(61)]が出土している。

b. 2区

北側の2区では、第1面は1区で現代生活面と確認されたため、2区では調査を実施せず[図3]、重機で当初から第2面を目指し表土剥ぎを行ったところ、GL-80cm(標高1.8m)で黒褐色砂質土が広がったため、この高さを2区第2面とした。精査したところ、遺構やリップルマークは確認できなかった。また、2区第2面東端には近現代炭ガラの面的な広がりを確認した[図4, 図7(37層), 写真5]。

2区第2面の記録・写真撮影ののち、重機で全体下げを行ったところ、2区西半GL-110cm(標高1.5m)で砂丘面上に中世のピットを確認し、この高さを第3面とした。2区第3面中央では砂の縄状堆積(遺構なし)を検出した。2区第3面東端では黒褐色砂質土が東へ落ち込み、覆うように近世末~近代遺物と炭を含む包含層が堆積していた[図7(26-28-30層)]。人力で掘り下げたところ、包含層下部で褐色砂丘面(遺構なし)を確認した。東端は炭ガラがさらに深く落込み(SX-3)、標高1.7mで地下水が湧いた。また、落込SX-3掘削時[図7(32~36層)]に土坑状の別遺構を検出し、性格不明遺構SX-4とした[図

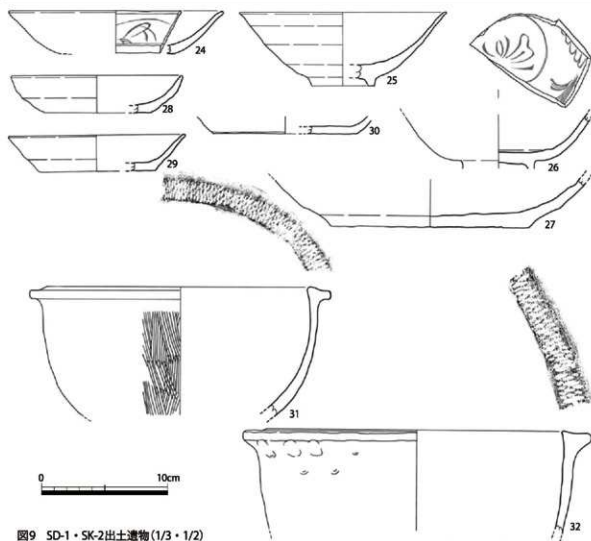
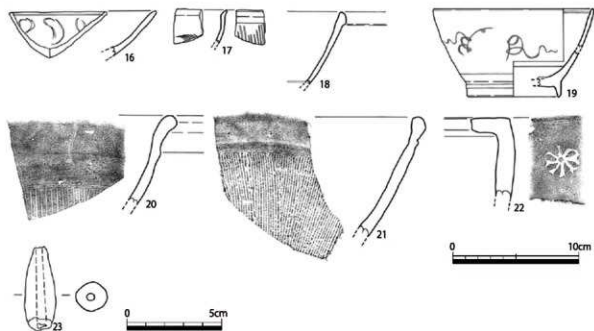


图9 SD-1・SK-2出土遺物(1/3・1/2)

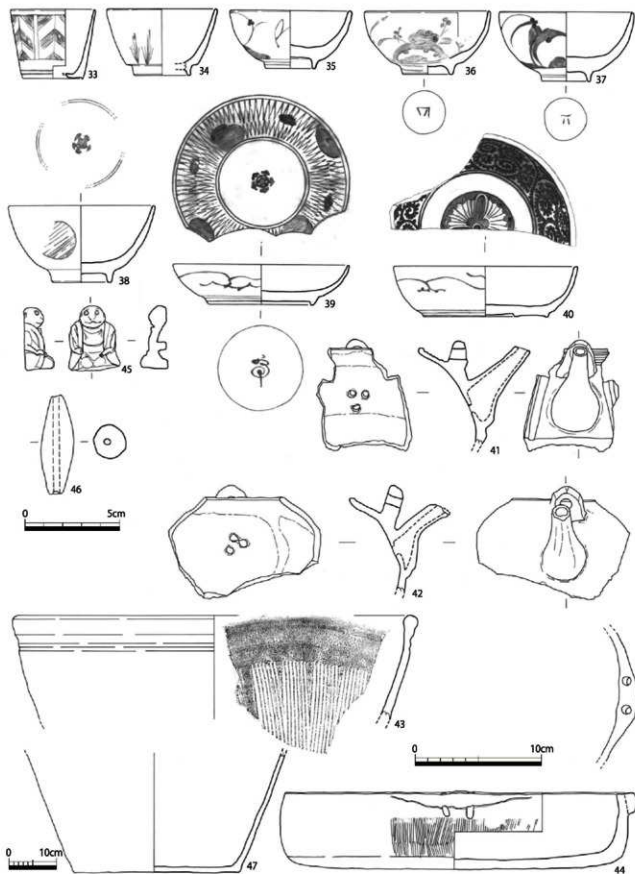


图10 SX-3出土遗物(1/3·1/2·1/8)

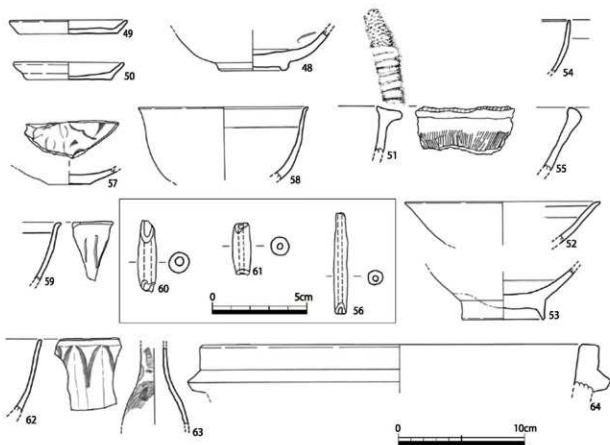


図11 SX-4・ビット・2区3面出土遺物(1/3・1/2)

5-写真12]。1区第3面の遺物は、SX-3西側の近世遺物包含層から陶器小坏・肥前系染付(碗・皿)・土瓶(陶器)土瓶・陶器播鉢・瓦質大壺・土鍋(炮烙)・土人形[図10(34-37-40-45-47)]が、SX-3掘下時に肥前系染付(猪口・碗・皿)・土鍾[図10(33-38-39-46)]近現代の樽・バケツ[写真13]が、SX-4から青磁碗[図10(48)]が出土している。また、2区3面ビットから土師皿・土師質鉢(鍋)・青磁碗・白磁(碗・小碗・皿)・瓦器椀・須恵質片口鉢・土鍾[図11(49-60)]が、2区3面遺構外から青磁碗・肥前系染付(瓶)・石鍋[図11(62-64)]が出土している。

3. 発掘成果からみた調査地の変遷

a. 中世

1区2区とも第3面の西側砂丘面上で土坑・ビット(性格不明の穴)を検出した。遺物の時期は鎌倉時代頃(12-14世紀)で、遺構の時期も同時期である。遺構の性格は不明だが、生活関連遺構と考えられる。

本調査の西側隣接地では箱崎遺跡第41次調査が行われ、12世紀の木棺墓・井戸・土坑等の生活遺構が確認されている。この時期を中心に集落としての箱崎遺跡は栄えたが、13世紀以降は遺構は極端に減少し、13世紀後半には集落としての機能は失われていたとの成果が得られている。本調査により41次調査で確認された中世集落「箱崎遺跡」の生活遺構がさらに東側まで広がっていたことが明らかになった。また、2区第3面中央-東端の砂丘面が東へ傾斜する部分からは中世の遺構が検出されなかったことから、本調査の2区第3面西側部分が中世「箱崎遺跡」の東端といえる。

b. 近世

1区第3面南半で検出した東西方向近世溝SD-1は、箱崎遺跡第53次調査の近世溝SD065と時期・方向・位置・規模が類似し、連続する溝ないし関連する溝とみられる。これらの溝は現在の今福町の北境にはば重なり、現在の箱崎の町割りの起源は溝の時期である近世に遡ると推測される。文献資料からは、江戸時代はじめの唐津街道付替え(1663)以後、宿場町「箱崎宿」として整備されたことが分かっており¹、時期的に一致する。この溝は中世集落から近世「箱崎宿」へ変化した様子を考古学的に示すものである。

第3面近世溝SD-1を覆うように第2面の黒褐色砂質土が堆積した後、平面上同位置で真上、かつ近世溝SD-1と同方向に第2面杭列が作られており、杭列も箱崎町割りに関するものと考えられる[図4]。

c. 近現代

第2面の黒褐色砂質土は、中世集落が営まれ、江戸時代町割りの溝が作られた砂丘面(第3面)全体を覆っていた。特に2区の砂丘面が東へ傾斜する部分を覆う土(SX-3西側近世遺物包含層)には、近世末から近代の土器・陶磁器・炭等の遺物が大量に含まれ、また、第2面から続く東端の落込SX-3からは樽やバケツなどの近代遺物が出土した。これは幕末から明治時代にかけて、多々良潟を徐々に埋め立てて東側へ土地を広げ、市街地化を進めた過程を考古学的に示すものと考えられる。生活の廃棄物を埋立土に用いた、あるいは砂丘面東傾斜部分が廃棄場所だった等の理由により、遺物包含層が形成されたとみられる。出土遺物の一括性からこの時期の箱崎の物資文化を知る上での貴重な資料である。

1区第2面南半のリップルマークは1区の層位関係と2区の発掘結果および出土遺物から、時期は江戸時代以後、幕末-近代以前と推定され、この時期の埋立ての状況を示すものとする。一般にリップルマーク(漣痕)は干潟の底等、ゆるやかな水の動きのある水底に形成されるもので、調査地点は多々良潟に接する場所であり、明治32年までは湿地との境であった[図12]。このリップルマークは幕末から明治時代にかけて、水害や気候変動により多々良潟が一時的に広がったことを示す可能性がある。

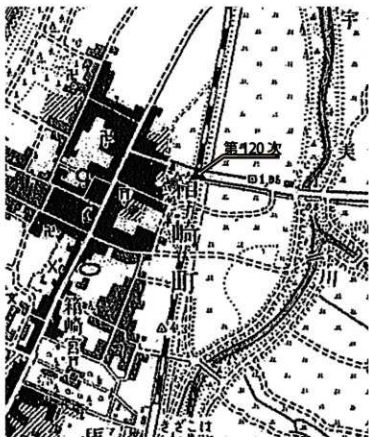


図12 調査地周辺地図(明治33年)

¹ 有田和樹2018「箱崎宿と箱崎御茶屋」『アジア遊学224アジアのなかの博多湾と箱崎』(勉誠社)



写真1 1区第1面全景(東から)



写真2 1区第2面全景(東から)



写真3 1区第3面全景(東から)



写真4 第2面杭列・リップルマーク(北から)



写真5 2区第2面完掘状況(北から)



写真6 2区第3面完掘状況(北から)



写真7 1区第2面リップルマーク(西から)



写真8 1区第3面SD-1断面土層(西から)



写真9 1区第3面SK-2遺物出土状況(東から)



写真10 1区第3面SK-2完掘状況(東から)



写真11 2区第3面SX-3西側包含層(南から)



写真12 2区第3面SX-3・4掘削状況(東から)



写真13 2区第3面SX-3埋土内遺物出土状況(西から)



写真14 2区第3面SX-3掘削終了時状況(北から)

報告書抄録

ふりがな	ほこぎき71
書名	箱崎71
副書名	箱崎遺跡第120次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1515集
編著者名	赤坂亨
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2024年3月22日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
ほこぎき71 箱崎遺跡120次	ほこぎき71 東区箱崎3丁目8-46	40131	2639	33°37'08"	130°25'33"	20210915- 20211213	188㎡	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
箱崎遺跡120次	集落・散布地	中世、近世、現代	溝、ピット、リップルマーク	土器、陶磁器、土製品 瓦、木製品、金属製品

要約	
	<p>調査地点は箱崎遺跡の北東部に位置し、宇美川へむけて下る東緩斜面にあり、かつての多々良瀬によって西側からえぐられる砂丘の東部際の遺跡の縁辺部にあたる。1区第1面は現代の生活面。第2面は黒褐色砂質土が全面に広がり、2面南半では標高方向のリップルマーク（波状堆積）および杭列を確認した。第3面で砂丘面となった。また、第2面杭列と同方向の近世の溝を検出した。第3面北半西側では砂丘面で中世の土坑・ピットを検出したが、東側では遺構・遺物は確認されなかった。2区第2面では遺構やリップルマークは確認できなかった。第3面では、西平砂丘面から中世のピットが確認され、第3面中央では砂の塊状堆積を検出した。第3面東端では近世末-近代遺物と炭を大量に含む包含層が堆積し、東端では包含層が落込み（SX-3）、暗黒灰色粘質土が堆積していた。粘質土中からは近代遺物が出土し、標高1.7m前後で湧水した。中世における箱崎遺跡の北東砂丘縁辺部における集落の様相、近世における唐津街道の宿場町箱崎宿の様相、近代の箱崎町の形成過程の一端が明らかになった。</p>

箱崎71

箱崎遺跡第120次調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1515集

2024（令和6）年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社月成印刷
〒812-0001 福岡市博多区大井2-13-27

